

海外日本人教会：その歴史、現状、ビジョン

—— (2) シンガポールの日本人教会 (2) ——

相澤 一

*本論は、昨年度に発表予定であった (2) シンガポールの日本人教会 (1) の続編である。もともとはシンガポールの日本人教会として、2つの教会を扱う予定であったが、時間と紙数の都合で (1) と (2) に分けた。その後、諸般の都合で (1) の発表が1年遅れになったので、2つの教会を扱う論文として執筆・再構成することもできたが、またもや時間と紙数の都合と、また、2つの教会について別個に論じたいと思ったので、(1) と (2) を別個の論文として同時掲載・発表という形になった。ご了承いただきたい。

なお、「海外日本人教会：その歴史、現状、ビジョン—— (1) シンガポールの日本人教会 (1)」の構成は、以下のようになっている。1～2章は、本論考と共通する序論で、3～6章はシンガポール日本語キリスト教会（シンガポールJCF）に関する内容となっている。

- 1 なぜ海外日本語教会か 問題の所在
- 2 明治～敗戦までのシンガポール日本人伝道
- 3 シンガポール日本語キリスト教会
- 4 2020年の追記
- 5 考察
- 6 今後の展望
- 7 シンガポール国際日本語教会

シンガポール国際日本語教会（International Japanese Church of Singapore, IJCS）の牧師である（取材当時）伊藤世里江牧師へのインタビューは、2017年2月27日、教会がふだん礼拝を行っているケイポーロードバプテスト教会（Kay Poh Road Baptist Church）で行われた。また、その後のコロナによる変化をフォローアップするため、2度目のインタビューを、2021年12月7日に、Zoomで行った。

以下、シンガポール国際日本語教会の歴史（7-1）、牧師のライフヒストリー（7-2）、そして教会の現状と活動として、①国際的性格、②バプテストという教派的背景、③戦争の記憶の継承、という3つの特徴について順に論じ（7-3、4、5）、さらに教会の未来のビジョンを論じる（7-6）。それからコロナ禍の中での変化と対応を扱い（7-7）、最後に考察を行う（第8章）。

7-1 シンガポール国際日本語教会の歴史

7-1-1 前史 牧師招へいまで

シンガポール国際日本語教会の週報には、裏面に「IJCSの伝道ビジョン 過去の歴史を踏まえて和解の使命をもちつつ、キリストの福音を伝えるためにシンガポールの地に根を下ろし、家族と共に集える日本語と英語のバイリンガル教会の構築」とあるが、このビジョンは、教会の性格と歴史を総括していると言える。「過去の歴史を踏まえて和解の使命を持ちつつ」とあるように、この教会の設立は、戦時中の日本の戦争犯罪と深い関係がある。

以下、シンガポール国際日本語教会の初代牧師であり、帰国後は日本バプテスト連盟川越教会の牧師をして、現在は引退している、加藤享牧師が、シンガポール国際日本語教会20周年記念礼拝に際して作成・発行した配布物によって概観してみよう。

シンガポール国際日本語教会は、日本バプテスト連盟の宣教師派遣によって始められた教会だが、宣教師派遣要請に至るまでの前史も、教会を理解するために重要である。

日本にシンガポールへの牧師派遣を要請したのは、当時シンガポールバプテスト連盟総主事であったジョン・チャン牧師である。師の両親は中国人であったが、経済的な事情のため、当時シンガポールにあった南洋女子中学校の教師をしていた熱心なクリスチャンの女性が、師を養子として引き取った。

ところがその少し前に太平洋戦争がはじまり、当時イギリス領だったシンガポールは日本に占領された。そのころシンガポールには多くの華僑が暮らしていたが、当時の日本は中国と戦争中であり、5万人ものシンガポール在留の中華系住民たちが、「大検証」と呼ばれる虐殺の被害に遭った¹。南洋女子中学校は日本に接收され、チャン牧師の実父も亡くなり、師の養母は日本への強い憎しみを抱いた。

やがて戦争が終わり、学校も再開され、養母は定年まで学校に勤めたが、引退後も日本への憎しみは消えることはなかった。しかしあるとき、すでに牧師となっていたチャン師から、「お母さん、熱心な信仰を持ちながら、どうしていつまでも日本人を赦せないのですか」と言われ、彼女は顔色を変えて自分の部屋に閉じこもってしまった。1週間後に部屋から出て来た彼女はチャン師に、「あなたの言う通りです。お母さんは間違っていました。イエスさまにお詫びしました。日本人を赦します。どうぞシンガポールに暮す日本人がキリストの福音を聞いてくれるように、宣教師の派遣を、日本の教会に頼んでおくれ」と語った。こうして、教会の設立への動きが始まった。

7-1-2 牧師招へい～現在まで

チャン牧師は、日本バプテスト連盟に宣教師の派遣を要請した。他方、日本バプテスト連盟のほうでも、1980年代からアジアへの宣教師派遣を模索していた。日本バプテスト連盟のルーツである、アメリカの南部バプテストは、もともと世界宣教への関心が強い教派であり、日本バプテスト連盟でも、日本から海外に宣教師を送り出そうという機運が高まっていた。そこで、日本からの宣教師を受け入れる用意があるか、アジア諸国のバプテストの団体に対して問い合わせたところ、多くの国から積極的な返事

1 大検証については、高嶋伸欣・鈴木晶・高嶋道・渡辺洋介, 2016, 『シンガポール 旅行ガイドにないアジアを歩く』(梨の木舎): 52-69、陸培春, 1997, 『観光コースでないマレーシア・シンガポール』(高文研): 67-99などを参照。

が返ってきた。そこで、各国からの要請に従い、ある国には神学校教師が、ある国には日本語教師が派遣されたが、シンガポールに牧師として行くという希望者は、なかなかあられなかった。

しかし、1995年になって、当時札幌バプテスト教会の牧師をしていて、国外伝道委員長でもあった加藤享・喜美子夫妻が、日本バプテスト連盟派遣宣教師としてシンガポールに赴任することとなった。加藤師は、日本の戦争責任告白のわごととして、アジアに宣教師として赴任したいという祈りをもっていたという。そうして同年5月にシンガポールに赴任し、翌年7月に宣教師館のリビングにて第1回のシンガポール国際日本語教会の礼拝を持った。同年9月に近隣のルーテル教会幼稚園に礼拝の場所を移し、1999年には、現在も続くケイポーロードバプテスト教会での礼拝を持つようになった。

その後、何人かの牧師の交代を経ながら、2004年には政府公認教会となり、また、2009年に、宣教師が派遣されてくるという形ではなく、教会が牧師を招へいするという形へと移行した。2013年に、現在の伊藤世理江牧師が着任。師は、バプテスト連盟アジアミッションコーディネーターを兼務しつつ、現在に至っている。

7-2 伊藤牧師のライフヒストリー シンガポール国際日本語教会への道

7-2-1 前史 洗礼まで

インタビューをした伊藤世理江師は、シンガポール国際日本語教会の4代目の牧師になる。その信仰の歩み(ライフヒストリー)はたいへん興味深いものであるが、ここでは本論に関係ある事柄にだけ絞って簡潔に記述する。

伊藤師は、シンガポール赴任までの歩みを振り返ると、ずっと前からアジアの教会への道が備えられていたという。

師がキリスト教に触れたきっかけは、入った大学がたまたまキリスト教の学校だった(入学した際は、自分が入学した学校がキリスト教の学校だという意識すらほとんどなかったという)ことから始まる。そこで出会った担当の先生たちが熱心なクリスチャンで、チャペルにも出席させられたのがキリスト教とのかかわりの始まりであった。その後、軽井沢クリスチャンセンター(後の恵みシャレー軽井沢)で開かれた英会話キャンプに誘われて出席したが、それは青年伝道を目的としたイベントであり、師は、そこで出会った神学生との対話を通して真剣にキリスト教や聖書について考えるようになり、のちに東京バプテストチャーチで洗礼を受けた。

7-2-2 アジアとの出会い

そして、日本にはもっとたくさんの伝道者が必要だという思いから、バプテストつながりで西南学院大学神学部に進学。そして、キリスト教教育を専門に勉強したいと考えたが、日本にはキリスト教教育を専門に勉強できる学校がほとんどなかったため、1984年に、アメリカのテキサス州フォートワースにあるサウスウェスタン・バプテスト・セミナリーに留学した。これは非常に大きな神学校で、師が留学していたころは学生が世界中から4000人ほども集まっており、アジアからの留学生も100人以上いた。そして、彼らと交流する中で、アジアの教会について知るようになり、また、フィリピンや韓国からの

留学生から、戦時中に日本が行った残虐行為、それも自分自身や自分の身内が実際に受けた体験について聞き、非常なショックを受けたという。それ以来、いつかアジアのどこかで、日本の戦争責任のことを覚えながら、アジアの人たちと一緒に福音のための働きができれば、というビジョンを持つようになり、帰国後も、日韓の歴史や、東南アジアの歴史などに、より深く関心を持つようになった。

7-2-3 日本国内での活動

帰国後は、バプテスト連盟で出版している教会学校の教案誌『聖書教育』の編集の仕事をするようになり、それをライフワークとも感じていた。しかし、2000年ごろ、アメリカの南部バプテスト連盟が、女性教職を認めないということをはじめ、信仰告白を悪い意味でファンダメンタルなものに書き換えるということが起こった。さらに、その信仰告白についての同意を南部バプテスト連盟の宣教師たちに求めたため、連盟から送り出されて日本で活動している宣教師たちの間にも動揺があった。他方、日本バプテスト連盟は、すでに女性の教職者が多く出ており、彼女たちにとって、信仰告白の改定は、彼女たちを否定する「改悪」以外のなものでもなかった。伊藤師が代表をしていた「女性牧師・主事の会」は、南部バプテスト連盟理事長宛てに遺憾の意をあらわす手紙を送ったりしたが、そういった活動をしているうちに、やはり教会の牧師としてやっていきたいという思いが強くなってきた。ちょうどそのころ、山梨県の富士吉田の教会に招かれ、そこで主任牧師として働くようになった。富士吉田教会は、青木ヶ原の樹海にほど近いということもあり、自殺を考える人や、自殺しようとしたが死にきれなかったという人がしばしば訪れたという。伊藤師はそこで10年ほど牧師を務めた。

7-2-4 シンガポールへ

伊藤師は、このまま日本の地方教会の牧師としてキャリアを最後まで続けていくことも考えていたそうであるが、たまたま、シンガポールの教会が後任の牧師を探しているときに、バプテスト連盟の関係者のひとりが、伊藤師がアジアに関心を持っているという話をしていたことを思い出し、声をかけられた。師は、若い人のほうがいいのではないかと、いったんは遠慮したが、経験を積んだ人のほうがいいということで、招へいを了承し、2013年5月にシンガポール国際日本語教会に赴任。現在に至っている。

7-2-5 アジアンミッションコーディネーターの仕事

また、伊藤師は、日本バプテスト連盟アジアミッションコーディネーターも兼任している（2017年取材時）。カンボジアやインドネシアのバプテスト連盟が派遣した宣教師をサポートしたり、シンガポールバプテスト連盟など、近隣諸国の同じバプテスト関連団体とのコネクション作りと維持、アジア太平洋バプテスト連合（Asian Pacific Baptist Federation）の大会運営の協力など、つながり作りを行ったり、また、日本に帰国して活動報告をして、日本と海外をつないだりといった働きもしている。

7-3 教会の「インターナショナル」な性質

7-3-1 英語対応と日本語のニーズ

①多言語対応

この教会の正式名称は「シンガポール国際日本語教会 (International Japanese Church of Singapore)」であり、日本人や日本語がメインではありつつ、それに限定されない、「国際的」な性格を持つことが一つの特徴となっている。

シンガポールは人口の18%がクリスチャンであり、特に中華系の人の割合が多いが、非常に伝道熱心な人が多く、日本人の同僚を連れてきたりするので、新来者の半数以上はシンガポール人であるという。

ふだんの礼拝も、毎週50人くらいが出席しているが、そのうち日本人は半分くらいで、ほかにシンガポールをはじめ、香港、マレーシアと、いろいろな国の人が参加している。礼拝は日本語と同時通訳の英語で行われ、週報も日本語のものと英語のものが用意されていて、礼拝後の会話は、日本語のほかに中国語や英語が飛び交っている。

最近、シンガポールの日本人の中でも、永住者や国際結婚をした家庭では、日本語が第一言語ではない世代の子供が増えている。英語が第一言語の子供の場合、魂に響く言葉は日本語でなく英語になるので、子供たちの信仰の成長のために、英語対応も課題であるという。

②日本語のニーズ

しかし、日本人の場合は、日本語が第一言語であり、また、異国の地で日本語を求めている。国際結婚をしてシンガポールで子育てをしている家族が、子供が日本語を喪失しないように日本語に触れられる環境を求めているなどのニーズもある。

そうしたニーズに答える一環として、教会ではポプラ文庫という日本語こども絵本図書館を月2回、第2、第4金曜日の午後3時から4時半まで開いている（コロナのため2022年現在は休止中）。また、閉館前の30分くらいを使って日本語のお話し会や日本語の歌を歌ったりもしている。このポプラ文庫は、クリスチャンではない一般の人たちも40~50組ほどが訪れ、異なる環境で孤立しがちな人たちのケアにもなっている。

こうした日本語のニーズがあるので、日本語を全廃して英語に移行するということは考えてはおらず、また、日本語と英語の比率をどのくらいにするかも、はっきりと決めているわけではないという。伊藤師は、今できることを積み重ねて、送り出していく（海外の日本語教会のご多分に漏れず、多くの出席者がしばらくすると帰国などで教会を去る）しかないのであり、それが海外の教会の使命であると語る。

7-3-2 日本とシンガポールの文化の違い

①教会の敷居の低さ

伊藤師は、多くの日本人が、シンガポールのほうが教会に行く敷居が低いと語っているという。シンガポールはかつてイギリスの植民地だったこともあり、教会がそこかしこにあり（あまりありすぎて、新たな教会建設にかんしては厳しい規制がかけられているほどである）、歴史も長いので、キリスト教系の公立学校すらある。また、クリスチャンも周りにたくさんいるので、キリスト教は身近にあるものであり、敷居は低く感じられるようになるという。

また、個人差はあるが、海外に住んでいる人は日本から出ない人たちよりもオープンな傾向があるの
で、総じて日本にいた頃よりも教会に行きやすいと感じる人が多いようである。

②シンガポールの日本人と日本の日本人の違い

法律の関係で、シンガポールでは一定の収入がない外国人が在留し続けることは難しいため、シンガ
ポールの教会では、師が日本の富士吉田で牧会をしていたころにあったような、生活困窮者の訪問はな
いという。また、その頃のような、自殺を考えている人が頻繁に訪問してくるようなこともないという。
もちろんシンガポールにもさまざまな問題を抱えた日本人はいるし、そうした方のケアは必要であるが、
日本より大変という感じは、していないという。

③教会員の国籍による文化の違い

さらに伊藤師は、実はシンガポール人のほうが日本人よりもむしろやりやすいところがあるという。
もちろん言葉の壁はあるが、シンガポール人が相手なら、最初から文化が違うことはこちらも織り込み
済みであるし、彼らは思っていることや考えていることをはっきりと言ってくれるので、かえってやり
やすいという。

逆に、違いに配慮しなければならないのは、むしろ日本人たちのほうであるという。というのは、一
口に日本人といっても、駐在員と現地採用者とは、収入が違うし、生活も違う。シンガポールでは、
医療費がシンガポール人か永住者か外国人かで額が違ったりするので、伊藤師は、シンガポールにいら
ると、日本にいたときよりもはるかに、日本人の間にある違いを意識するという（しかしその一方で、す
でに在住4年目となりいろいろ慣れてくると、違いにもかかわらず一緒に暮らしているのだから過度に
神経質になる必要はないということも分かってきたという）。

④礼拝のスタイルは日本の教会に寄せている

教会の名前からして「国際」であり、礼拝で用いられる言語もバイリンガルであるが、礼拝のスタイ
ルは、意識的に日本の教会の礼拝のスタイルに寄せているという。

シンガポールの教会も、アメリカの教会のようにバンドが賛美をリードするのは教派を問わず広く行
われているが、シンガポール国際日本語教会の場合、月に1度ユースがリードする礼拝はバンドが賛美
をリードするが、それ以外はそういう形式にはしていない。

また、シンガポールの教会（教会に限らないが）は、服装がラフなのが一番の特徴で、結婚式の出席
者さえ軽装であり、日本人は違和感を感じるスタイルが、むしろ普通である。伊藤師の場合、シンガポ
ールに赴任した最初の頃は、きちんとスーツを着ていたという。しかし、今はみんながそこまで正装して
いないのと、とにかく暑くてとても正装などしてられないのとで、日本の通常の礼拝出席程度の、あ
る程度キチンとした服装をするだけになっているという。

7-3-3 会員の頻繁な入れ替わり

①メリットとデメリット

海外の日本人教会や日本語礼拝は、駐在員の帰国などで会員の入れ替わりが激しく、会員が定着しに
くいということがどうしてもあるが、シンガポールも例外ではなく、急な帰国命令に振り回されること
も多々あるという。

その結果、会員が次々に入れ替わってしまうことになり、そのデメリットはもちろんある。しかし、逆にそれによるメリットもあると伊藤師はいう。たとえば、会員が固定しないことで、一種の風通しのよさが生まれ、古い人が居座って新しい人が入りにくさを感じるということがなくなり、新しい人が入ってきやすくなっているという。実際、スモールグループなどの集会の出席者は、クリスチャンではないし、今まで教会に行ったこともない人が半分くらいいる（その中には、ミッションスクール出身で、かつてキリスト教に触れたことがあるという人もかなりいるという）。

残念ながら、日本国内の一部の教会には、会員とともに昭和から続く日本的なしがらみが残存していることは事実である。海外の日本人教会は、それに縛られていないのが強みであるが、逆に言うとそれは、日本の教会がしがらみにとられるのは、逃れられない運命のようなものではなく、相対的なものであることを示している。それは、日本的なしがらみに苦しんでいる教会にとっては希望であろう。

そして、新来者が次々と訪れると、教会に活気が生まれる。また、教会に求道中の人がたくさん通ってきていて、彼らが聖書に触れてだんだん変わっていく様子を見ることは、会員たちにとって非常にいい霊的な刺激となる。こうして、教会には非常に活気があるという。

② 役員の国籍条項

逆にメンバーが流動的であることから生じるデメリットで、シンガポール特有のことに、国籍条項——政府登録をしている教会は役員の過半数がシンガポール人または永住者でなければならないという条項——を満たすことが難しくなるということがある。日本人永住者が会員にいればこの条項はクリアしやすいが、そうでない場合、どうしてもシンガポール人を頼りにすることになる。しかし、シンガポール人の出席者は、シンガポール人向けの教会と掛け持ちしている人もいて、役員となると、どうしても負担が大きくなり、教会に来なくなってしまいうこともある。これについては、今のところいい解決法のアイデアはなく、いつも「祈りの課題」であるという。

7-3-4 謝儀について

日本との違いということで、ここで謝儀（牧師の給与）についても触れておこう。

シンガポール国際日本語教会の場合、初代牧師の加藤師夫妻は、早期引退をしていたので、シンガポール着任時には、生活費は年金、教会の活動費は日本バプテスト連盟から支払われるという形であった。そのため、教会が謝儀を支払う必要はなかったという。

加藤師の次に着任した岡村直子牧師は、給与も日本バプテスト連盟から支払われたが、じょじょに教会の人数が増えるにつれ、教会献金の割合を増やしていった。さらに、その次の大谷恵護牧師の時代には、先述の通り、日本のバプテストから派遣される宣教師という形ではなくなったが、大谷師も引退牧師であったため、年金を受給していたので、やはり教会が生活費を負担する必要はないままであった。

大谷師の次に赴任した、現在の牧師である伊藤師は、アジアンミッションコーディネーターの働きをしているため、住居の家賃を、ミッションコーディネーターのオフィスということで日本バプテスト連盟が負担し、それ以外は教会が負担している。2004年に教会が政府に認定されたので、教会が牧師を招へいし、牧師のビザを申請することもできるようになっている。

ただし、ビザは政府が定めた額を満たす給与が支払われる場合のみ許可されるので（ビザについて

は、牧師も一般のビジネスマンと同じ扱いである)、その規定を満たすためには、それなりの経済的基盤が教会に必要となってくる。しかし、教会員の入れ替わりが激しいので、これから先もこの条件を満たせるとは限らない可能性もある。この問題については、後に改めて取り上げる。

7-4 バプテストの教会であるということ

7-4-1 会員はバプテストに限定されるわけではない

シンガポール国際日本語教会の特徴として、バプテストという教派的背景が明確であるということがある。教会の歴史自体が、もともとシンガポールバプテスト連盟による宣教師派遣要請で始まり、その要請にこたえて宣教師を派遣したのも日本バプテスト連盟であった。

現在使われている教会案内のパンフレットには、「IJCS(シンガポール国際日本語教会)は、プロテスタントの教会で、バプテスト派に属します」、「1996年に日本バプテスト連盟から派遣された宣教師によって始められました」、「シンガポールバプテスト連盟の教会やアジア世界の教会と協力しながら働きをすすめています」と、明確にバプテストということが謳われている(とはいえ、「教派にかかわらず……いろいろな方が出席している……教会です」とも記されていることも付言しておく)。

もちろん、ただでさえ人数が少ない日本人クリスチャンの中の、さらにその一部であるバプテストだけを相手にしている教会であるわけではない。伊藤師によると、現在の会員は、この教会が初めてのバプテスト教会という人も多いという。伊藤師は、この教会がバプテスト教会であることは知っておいて欲しいという思いはあり、折りに触れて周知しているそうである。しかし、たとえば日本基督教団の教会の出身者が教会に来て違和感を持つということはありません、使っている聖書が新共同訳ということもあり、逆になじみやすいようであるという。

7-4-2 帰国後の出席教会

海外で信仰を与えられた人が、帰国後も教会につながるというのは、海外日本人教会にとって大きな願いであり課題である。伊藤師は、個人的に教会の様子を一番よく知っているのはバプテストの教会なので、いちばん紹介しやすいという。とはいえ、バプテストの教会に限定しているわけではなく、帰国後の住所の近くに他教派の教会があれば、そこを紹介することもあるという。ただし、他教派の教会は、どんな教会で牧師はどんな人かよくわからないことが多いため、バプテストの教会の方が紹介しやすいという。

バプテストは、世界バプテスト連盟という大きな団体があり、アジア、北米、南米、ヨーロッパ、アフリカといった地区連合もあり、シンガポールにもシンガポールバプテスト連盟、日本にもバプテスト同盟、バプテスト連盟、沖縄バプテスト連盟と3つの団体がある。教派がはっきりしているということは、それによって狭まる可能性もあるが、逆に、広がりつつながりがしっかりしている教派なら、それを利用して、更地の状態からでなく広がりつつながりを持つことができるというメリットになる。

7-4-3 シンガポールJCFとの関係

具体的に、同じシンガポールにあるもう一つの日本人教会である、シンガポールJCFとの関係はどうか。

初代牧師である加藤師がシンガポールに到着したとき、なんのツテもアテもなかったのですが、まず、すでに活動していたJCFの礼拝と集会に出席し始めた。その後、加藤師は、JCFとは別に、バプテストの集会を持つようになったが、礼拝の時間をずらしたりして、信徒の奪い合いのようなことにならないように配慮した（シンガポール国際日本語教会では、今でも礼拝の開始時間が午後4時だという）。このときは、どちらに出席するかということで、信徒たちの間に多少の動揺があったようではある。しかし現在では、双方とも50人以上の礼拝出席がある教会になっており、協力してコンサートを行ったりと、良好な関係であるという。

シンガポールにやってきて、日本語礼拝への出席を考える人は、たいていは両方の礼拝に出席してみようから決めているようだという。2つの教会のあいだには、JCFは新改訳聖書、国際日本語教会のほうは新共同訳といった違いがあり、それ以外にも礼拝の雰囲気の違いなどもあるのだろうが、伊藤師は繰り返し「教会が2つあるのはとてもいいことだ」と語っていた。それは、第一には「選ぶことができる」からであるが、一方の教会にばかり人が集まったり、教会同士で信徒の奪い合いのようなことにならない限り、複数の教会があるということは、教会が1つしかなくて選びようがないせいで起こるトラブルや問題を防ぐことになるようである。

7-5 戦争の記憶の継承

7-5-1 教会設立の背景にある、日本の戦争責任

教会の伝道ビジョンに「過去の歴史を踏まえて和解の使命をもちつつ」とあるように、戦争の記憶の継承、特に戦時中に日本がシンガポールで行ったことについての記憶の継承ということも、シンガポール国際日本語教会がひじょうに大切にしていることであり、教会の特徴のひとつとなっている。

7-1-1に記したように、教会の歴史のそもそもの発端である、ジョン・チャン牧師が日本に宣教師派遣を要請したことの背後には、日本の戦争犯罪があった。それ以来、日本の戦争犯罪の記憶の継承という線は、教会の歴史を貫く一本の糸のようにつながっている。

初代牧師である加藤師がシンガポールに赴任したころは、今と違って、まだ日本の戦争犯罪への感情が生々しく残っていたという。師がシンガポールに来た年の8月15日、ある現地の英字新聞の一面に、「我々アジアの人間は、どうして日本人からは“we apologize”という一言を聞くことができないのか」という記事が載っていたのを見て心が凍る思いがしたと、加藤師は20周年記念礼拝の配布物に記している。そして、「戦後50年も経て、東南アジアの中心シンガポールで、なおこのような言葉を、つきつけられた……皆さん、この現実を決して忘れずに、シンガポールで、またアジアで暮らしてください」と記している。

また、加藤師は同年8月の日本バプテスト教会川越教会の教会報でも、やはり戦争について触れ、「平和を愛する諸国民の公正と信義にどこまでも信頼を寄せて近隣諸国との交わりを親密に結んでいくこと

こそ、アジア諸国の人々への私たちの15年戦争の謝罪の証だと思えます」と、やはり強い思いを吐露している。

7-5-2 シンガポールの、戦時中の記憶の取り扱いの変化

伊藤師によると、師がシンガポールにやってきてから、シンガポールという国が、かつて日本がやったことに対してどのような態度をとるかが変わってきているという。

かつて日本軍の山下奉文中将がイギリス軍のパーシバル中将に降伏文書にサインさせた場所であるフォード自動車工場は、現在は戦争博物館となっているが、伊藤師によると、この博物館の展示や上映ビデオは、以前はかなり「ドギツイ、生々しい」ものであった。しかし、そういった展示はどんどんマイルドなものに置き換えられ、戦争中の話も、日本の戦争犯罪よりも、戦争中にシンガポールの人たちはこんな風ががんばりました、ということに主眼が置かれるようになってきているという。しかし他方、自分の身内を日本人に殺されたというような経験をしている世代の人たちもまだいて、そういう人たちの生の証言を聞くこともまだできるというのが、今の状況である。

7-5-3 現在の取り組み

現在の牧師の伊藤師も、7-2-2で記したように、留学中に、アジアでの日本の戦争犯罪について深く考えさせられる経験をしていることもあり、教会に赴任してからも、戦争の記憶の継承を非常に大事なことと考えている。日本人として、かつて日本が何をしたかを知っておくことは重要である、と伊藤師は言う。

また、バプテストという教派に属しているということも、そのことと無関係ではない。伊藤師は、バプテストという教派自体が、もともと政教分離のための戦いをしてきた教派であり、マルティン・ルーサー・キング牧師のような先達もいる教派なので、信仰と、戦責告白や平和問題といったことが切り離されるということは考えられなかったし、そのような歴史を自覚的に（教派も教会も、そして伊藤師自身も）継承しているという。

とはいえ、日本の戦時中の記憶の継承を教会でどう取り扱うかということについては、（日本基督教団で戦責告白を巡る混乱があったように）実際問題としては決して簡単ではない。伊藤師も、若い世代に日本の戦争犯罪を伝えていくことの難しさを感じているという。教会でそのことばかりを話すわけにもいかないし、かといってまったく話さないという訳にもいかないので、「バランス」が大事だと考えているという。

師は、教会で勉強会を開くようなことはしていないそうであるが、実践している活動として、バスを借りて、フォード戦争博物館をはじめ、戦跡の訪問の引率を、すでに4、5回行っているそうである。

7-6 教会と将来のビジョン

7-6-1 アジアのネットワーク作り

今後の展望について、伊藤師は、できるだけ長くシンガポールにいたいという希望を持っているとい

う。先代の牧師たちは、70過ぎまでやった方たちが複数いるので、せめて70歳まで、可能であれば75歳くらいまで今の教会で働くことができればという。

シンガポールのチャンギ空港は、いわゆるハブ空港で、諸国への航空路線が非常に充実している。師は、今後も、「若い人への引き継ぎも考えながら」と留保しつつ、アジアとのネットワーク作りを強化し、日本への発信もするという仕事を続けていきたいという。

アジア諸国には、自然災害や紛争に苦しめられている地域が多くあるが、そうした地域の多くは中心部から外れた周辺地域であり、また、そうした地域には、バプテストの宣教教動（たとえばミャンマーで宣教活動をしたジャドソン宣教師などはよく知られている）によって現在クリスチャンになっている人たちが非常に多い。なので、アジアのバプテストのカンファレンスがあると、神学的な議論とあわせて、平和構築や自然災害が話題に出る。そうしたカンファレンスでは、日本もまた自然災害が多い国であり、東日本大震災や原発事故などもあったので、知見のシェアを期待されるという。

そうしたことを通して、主としてアジアでのネットワークの形成と強化を目指していくというのが伊藤師のビジョンの一つであるという。とはいえ、実際にはアジアの国々は年に1、2回行ける程度なので（2017年の取材当時）、ネットワーク作りは長期計画でやっていく必要があるという。

7-6-2 日本国内教会への「送り出し」

先に触れたように、海外の方が教会の敷居が低く、また若い世代の人たちが多いので、そういう人たちが海外でクリスチャンとなり、帰国してからも日本の教会につながれば、それは日本の教会にとって大きな可能性である。とはいえ、海外の教会でも現地人を対象とする教会は、日本の教会とは教会文化がかなり違うので、帰国後に日本の教会に出席してもなじみず、つながり続けるのが難しいという現実もある。その点でも、海外日本人教会には可能性がある。

海外の日本人教会は、ほとんどの会員が遅かれ早かれ帰国してしまい、シンガポール国際日本語教会も例外ではない。しかし多くの海外日本人教会は、それを「送り出す」ととらえており、伊藤師も、送り出すことはシンガポール国際日本語教会の使命であるという。7-3-2で記したように、シンガポールは日本よりも教会の敷居が低いので、シンガポール滞在は、聖書やキリスト教に触れるチャンスであり、ぜひそのチャンスを生かしてほしいという。

7-6-3 海外の教会が日本の教会の未来のモデルになる

また、伊藤師は、海外の日本人教会が、日本の教会のモデルになるということを考えているという。

今後、日本に外国人や外国にルーツを持つ人が増えていくことは間違いないのであり、その中で、日本の教会も、教会員はもちろん、役員もそういう人たちが増えていくであろうし、将来的には外国人抜きではやっていけなくなるだろう。そういう意味で、海外日本人教会は、日本の教会の未来の姿であり、さらにそれを越えて、あるべき日本の教会の将来像を示すことを期待されているとも言える。日本のバプテスト連盟も、シンガポール国際日本語教会に対して、それを期待しているという。

日本の教会では、ややもすれば海外の教会でクリスチャンとなって帰国した人を「変な人」扱いしたり、外国人が増えることを「やっかいな問題」扱いしたりすることがないとはいえない。しかし、そう

いう人たちが教会に増えることが、むしろ聖書に示されているような多文化共生的な教会のあり方なのであり、伊藤師は、聖書の時代も教会は異邦人と呼ばれる人たちを受け入れ豊かになっていたことを想起すべきであり、そのようなあり方をするようになることが、日本の教会には求められているという。また、師は、海外の日本人教会で、現地の人たちが日本人を温かく迎え入れてくれていて、日本人たちとよい兄弟姉妹の関係を持っている様子を、ぜひ日本の人たちに見てほしい、という。

伊藤師は、海外とのつながりは、これからの日本の教会の生きる道であるという。すでに日本のカトリック教会は、多くの外国人が出席しているが、働き盛りの年齢の人が多く、すでにクリスチャンである人も多くいる。伊藤師は、プロテスタント教会も、そういう人たちが入ってくることで開けてくる可能性は非常に大きいのではないかという。

海外の日本人教会は、これから日本の教会が本格的に直面する、多文化共生ということ、すでに経験している。なので、多文化共生的な教会形成を、日本の教会と一緒に行っていきたいというビジョンを、師は抱いているという。

7-6-4 日本の若者に望むこと——世界の中の日本を知り、多文化共生のさきがけとなる

また、伊藤師は、アジアの国々との教会のネットワークを利用して、日本の学生をカンボジアに引率したり、シンガポールに招いたりというビジョンも持っているという。日本の若者に、「日本を出て欲しい」、「もっとアジアのことを知って欲しい」という願いを、伊藤師は取材の中でたびたび口にしました。

それは、かつて日本が戦争の時にアジアでしたことについて知って欲しいということもあるが、それだけではない。残念ながら日本では、アジアの人たちに限らず、外国人が温かく迎えられているとは言えない現実がある。しかし、たとえば、シンガポールで現地の人たちが日本人を温かく受け入れてくれているのを見れば、日本にいる外国人への態度も暖かいものになるだろう、と師は期待する。海外の人たちが日本人を温かくむかえてくれている様子を見て、もし日本人がアジアで排斥されたらどれほど辛いかということを考えてほしいという。

また、アジアの国々は、たとえ仏教やイスラム教の信者が多数派の国であっても、教会は非常に活気があり、若い人たちもたくさん集まっている。日本の若者たちには、そういう様子もぜひ見てほしいという。

7-6-5 日本への宣教師派遣

シンガポール国際日本語教会からは、ミッションチームを派遣する予定であるが(2017年の取材当時)、その構成員は全員がシンガポール人であるという。また、すでに日本に宣教師を1組送り出してもいる。教会から、シンガポールの神学校を卒業した中国人夫妻を、東京都北区にある日本バプテスト連盟の教会に宣教師として送ったが、その教会は、多文化共生を教会のテーマにし、全国のバプテスト教会もサポートしている。海外に宣教師を派遣するのは、教会としては大きなチャレンジであるが、それは日本の教会に対して海外の教会ができる貢献であるという。

7-7 2021年の追記

7-7-1 コロナ対応——礼拝のオンライン化

2020年から始まったコロナ禍はシンガポールも襲い、教会もその影響を受けた。教会への取材はピフォーコロナの時点で行ったものであったので、急遽Zoomによる追加取材を2021年12月7日に行い、パンデミック以降のお話を伺った。

シンガポールは、世界的にパンデミックが起こっている時にほとんど感染が広がらず、コロナ対策優等生のような国であった。シンガポール国際日本語教会も、しばらく対面での礼拝は中断になったが、2020年の11月から21年の4月まで、いったん復活した。しかし、日本の感染者数が減ってきたのと同じころ、逆にシンガポールでは増え出したので、再び対面礼拝は中止になり、2021年の5月から今（2021年12月）に至るまで、ずっとオンラインでの礼拝が続いている。

シンガポールでは、対面の集会を行う際は、人数制限、アプリによる来場者チェック、検温など、感染対策プランの提出を義務づけられ、検査官がチェックに来たりと、かなり厳しい制約下での実施となっている。シンガポール国際日本語教会も、対面礼拝を再開したときには、それらのことを求められていた。現在、対面礼拝は休止中であるが、近々再開するさいには、プランの提出が必要となる。

2020年に感染が広がり始めたころは、ほかの教会がクラスターになったので、シンガポール国際日本語教会は、早々と礼拝をオンラインに切り替えた。最初はFacebook、次にLINEのグループチャットを利用した。Zoomは、セキュリティの問題で教育庁が学校での使用を禁止したこともあり、当初は使用には消極的だった。しかし、Zoomのセキュリティが改良され、教育庁も使用を許可したので、教会も、2020年5月30日のペンテコステ礼拝から、Zoomによるオンラインのライブ配信礼拝を始め、それ以降ずっとZoomによるオンライン礼拝が継続中である。

7-7-2 オンライン礼拝の現状

現在、日曜のZoom礼拝には、30~40人ほどが参加しており、以前とそれほど変わっていないという。信徒たちのあいだには、Zoom礼拝に対する反感や拒絶感のようなものは特になく、逆に、感染が広がっているということもあり、コロナ感染の不安が大きい人でもオンラインの礼拝に参加できているという。

日本の教会は、対面礼拝に拒否感を持つ人もいるし、オンライン礼拝など本当の礼拝ではないという主張をする人もいるし、牧師が機械に弱くてオンライン礼拝を行えない、高齢の信徒がPCを扱えずオンライン礼拝に参加できない、などの問題も起こっている。しかしシンガポールでは、国をあげてのオンライン化が進んでいて、今やPCやスマホがライフラインであり、国をあげて高齢者のバックアップもしているため、オンライン礼拝に参加できないという人はいないという。

ただし、オンライン礼拝は、席上献金が集めにくいという問題があるが、教会堂を貸してくれている教会が、2020年度については会場使用料を返金してくれ、収入減はカバーされた。しかし今年度はどうなるかわからないし、こちらから言い出すのもどうかと思われるので、ここは不安要素であるという。

今後のことを考えると、対面での礼拝を復活させることを目指しつつ、Zoomによるオンライン礼拝も継続する予定であるという。というのは、感染不安の人が出席できるだけでなく、日本に帰国したが教会を見つけることができない人が、新しく出席教会を見つけるまで、オンライン礼拝や集会に参加で

きたのである。伊藤師自身も、シンガポールにいながらにして日本の集会に参加できたり、日本の礼拝に説教者として招かれたりと、オンラインのメリットを享受することができているという。というわけで、将来的には礼拝は、対面を主としつつも、オンラインも並行して行う方向で考えているという。

礼拝以外の活動については、ポプラ文庫と教会学校は休止中。聖書研究会や祈祷会は、すべてオンラインである。これらについては、将来的には聖書研究会は対面とオンラインを半々、平日夜の祈祷会は、もともと人が集まるのが難しかったということもあり、オンラインを前向きに考えていくという。

7-7-3 今後のアジアでの働き

伊藤師の、日本バプテスト連盟のアジアミッションコーディネーターの任期は、2022年の3月で終わるという。しかし、シンガポール国際日本語教会の牧師としての働きはまだ続くので、アジアの教会とつながる動きは、自主的に継続していきたいという。また、シンガポール国際日本語教会はシンガポールバプテスト連盟に所属しており、この連盟に所属する教会は、シンガポール国内には37であり、それほど多くはない。しかし、ミャンマーをはじめ、近隣のアジア諸国の人たちが所属しており、また、近隣のアジア諸国のバプテスト教会とのつながりが深いので、フィリピンやインドネシアといった国の教会形成をサポートしたり、開拓伝道をサポートしたりといった働きもしている。

7-7-4 今後の展望

伊藤師は、海外の教会は5年もすると違う教会のように変わってしまうという。シンガポール国際日本語教会も、2017年の1回目の取材時から、2021年の2回目の取材までの約4年のあいだに、コロナのような大事件をはじめ、役員会の会長をつとめていた方が突然帰国したりと、教会にはいろいろな変化があった。それは、教会が不安定であることを意味し、さらにそれは、将来計画や、いわゆるプランニングが難しいことも意味する。

日本の教会には、自前の教会堂を持って、自前の牧師を雇って自前の牧師館に住んでもらって、ようやく一人前の教会、というイメージがいまだにあるかもしれない。しかし、海外日本人教会はそれを目指すべきではないだろう。これは、筆者が海外日本人教会を訪れていろいろな牧師たちと意見交換をして、意見が一致することであり、伊藤師も同意してくださった。

シンガポールの場合、そもそも不動産がべらぼうに高いので不動産の取得はまず不可能であるが、たとえ教会が非常に上り調子で会員もたくさん集まっているときに土地や会堂を取得できたとしても、それからは税金や維持管理費を支払わなければならない。教会の不安定さを考えると、将来的にそれが大きな負担となりかねない。

また、教会が謝儀を牧師に支払続けることができなくなるという可能性も考慮しなければならない。シンガポールでは、牧師もビジネスマンと同じビザであり、一定以上の給与が支払われなければビザの発給の許可が下りない²。また、生計を立てる仕事を別に持ちつつ牧師の仕事というのはビザの規定に違反することになる。なので、一定以上の財政規模の教会でないと、牧師を招へいすることは難しい。

さらに、シンガポールは年々ビザの取得が厳しくなっており、更新はまだしも、新規はかなり厳しくなっている。伊藤師の後任の牧師を招へいできないという可能性もありうるのである。

8 考察

これまで、シンガポール国際日本語教会の歴史、現在の牧師である伊藤師のパーソナルヒストリー、教会の現在の活動と未来のビジョンについて概観してきた。ここでは（以下、シンガポールの日本人教会についての2本目の論文ということで、頭に2—とつける）、

2—①国際的性格

2—②バプテストであるということ

2—③戦争の記憶の継承

という3点が、教会の特徴として取り上げられた。そして、現在の課題として、

2—④オンライン礼拝によるコロナ対応

そして継続的な課題として、

2—⑤教会の不安定さ

が指摘された。

ここで、シンガポール日本語キリスト教会（シンガポールJCF）の論考における考察を踏まえ、海外日本人教会についての論考を、ここではさらに推し進めてみたい。

シンガポールJCFの考察では（こちらは、便宜的に頭に1—とつける）、

1—①「福音派的」というあり方

1—②日本での受け入れの課題

1—③インターネットが拓く新しい可能性

1—④日本型教会追随か、脱日本型教会か？

の4点について考察した。

両者を比較すると、同一のものもあるし、異なるものもあることがわかる。また、シンガポールJCFに関する論文を執筆してから1年たち、その間にコロナ対応でインターネットの利用に教会が慣れることで開けた新しい可能性もある。

8-1 コロナ対応と、教会の不安定さへの対応——「一人前の教会」像からの脱却

1—④と1—③で、海外の日本人教会は、自前の教会堂を持って、自前の牧師館に専任の担任教師に住んでもらって一人前の教会という教会像を目指すべきではない、ということを論じ、それとは別の行き方の可能性として、インターネット利用の可能性を指摘した。

そして、それについては、2—④と2—⑤で論じたように、シンガポール国際日本語教会も同じである。海外の日本人教会は、会員が不安定という性格があるので、財政的安定を前提とした将来計画を立てるのはどうしても難しい。

しかし、全世界を襲ったコロナ禍は、リアルに人が集まることや、リアルに牧師が出向くことが難し

2 専門職や管理職につく人が対象のEP(Employment Pass)の場合、2021年の時点で、4500シンガポールドル(約369,945円)以上の月額固定給を得ることが申請受理の条件。ただし業種によってはさらに高い基準が設けられており、年齢や経験に応じた収入を得ることも審査される。

い状況——今までは「気合と根性」しか解決法がなかった状況——でも、オンラインで教会は活動を続けることができるという道を開いた。

また、コロナの中で多くの閉業や廃業があったが、その中で、先が見えない不安定さを切り抜ける方法もだんだん明らかになってきた。たとえば、コロナ禍によって多くの飲食店が休業や廃業に追い込まれたが、その中で「ゴーストレストラン」が、ほとんど唯一の「飲食業の勝ち組」となった。「ゴーストレストラン」は、店舗がないため固定費がかからず、家賃がより安い物件で営業して経費を抑えることができる。また、商材とニーズがフィットしない場合、即座に別の場所へ移動するスピードと行動力、そして決断力のある「ゴーストレストラン」が、勝ち組の中の勝ち組となっている。

つまり、固定費をなるべく低くおさえることと、「こだわり」を捨てる決断力が、不安定を生き伸びるカギとなることを、コロナ禍でいちばん厳しい業界であった飲食業が実証したのであり、これは教会にとっても、大いに参考になるだろう。

コロナによって一般的となった、Zoomをはじめとするオンラインの利用は、固定費の低減ということに大いに役立つが、さらにそれを越えて、牧師が複数の教会を掛け持ちしたり、信徒も複数の教会を掛け持ちしたりするということが起こってくるだろう。牧師が暮らす国、信徒が暮らす国、教会の礼拝が行われる国がぜんぶ違うということも起こってくるかもしれないし、国外の教会と国内の教会という区別すら意味がなくなるかもしれない。

現在の教会のオンライン利用は、コロナという外圧によって生み出された、一種の「流行」でしかない、と言う人がいるかもしれない。しかし逆に、現在の流行が去り、インターネットが教会に根づいたところから、本当の教会のインターネット利用がはじまるとも考えられる。インターネットは、もともとは東西冷戦時に、メインフレームが核攻撃を受けてもデータを分散しておくことで難を逃れると考えられたのが始まりであり、その本質的価値は「分散」にある。それゆえ、教会にインターネットが定着するにつれ、新しいつながりと新しい分散が教会にもたらされるというのが、教会のインターネット利用の未来像となるのではないだろうか。

8-2 多様性の問題

8-2-1 シンガポールの現状

このように、シンガポールの2つの日本人教会の間には、さまざまな違いも存在する。シンガポール国際日本語教会の特色として挙げられた、2-①国際性、2-②バプテストという教派性、2-3③戦争の記憶の継承は、どれもシンガポールJCFには希薄、あるいは逆の特色である。

とはいえ、伊藤師は、シンガポールには教会が2つあって助かっているという。というのは、もし教会が1つしかなかったら、その教会がどうもしっくりこないという場合、我慢しながら通うことになるか、教会には行かないということになりかねない。2つあれば、信徒は選ぶことができる。

いうまでもなく、特定の教派的背景を持つか持たないかは、どちらがいいとか悪いとか、あるいはどちらが正しいとか間違っているとかいうことではない。教派的背景を持たないことによるメリットもあるし、持つことによるメリットもある。戦争の記憶の継承が大切であることはもちろんだが、どの程度

それに力を入れるかは、各人の思いもあるし、信念もある。1つの教会が同時にぜんぶを行おうとするのは無理があるし、目指すべきでもないだろう。

2つの教会が悪口を言い合ったり信徒の取り合いをしたりしているなら、信徒は選ぶどころか争いに巻き込まれるということになってしまうが、シンガポールの場合、2つの教会は、Win-Winの関係になっているようであり、そうであるなら、それは信徒たちにとってありがたいことであり、恵みである。

果たして、このシンガポールの事例は、特殊な例外だろうか、それとも、キリスト教会では標準的だろうか。

8-2-2 教会の壁の外の多文化共生

多様性をどう取り扱うかということについては、「教会の壁の外」のほうが、はるかに進んでいる。たとえば、グローバル企業では、コンプリヘンシブ (comprehensive) であることや、ダイバーシティとインクルージョン (diversity & inclusion) (岡田 2020: 71-73) が重視される。そして、多様な人たちがいることはよいことであるとみなされる。「人は、誰一人として同じではありません。だからこそ、その叡智を結集したときの可能性は無限大であるというのが、海外グローバル企業の共通認識なのです」(岡田 2020: 119)、「海外では『人と意見が違っているのは当たり前のこと』ととらえられます。その意見の違いがあるからこそ、それをぶつけ合うことで新しい考えが生まれるのであり、反対意見が出るのはとても良いことだという認識なのです」(岡田 2020: 127) といった認識が、多文化共生先進地帯であるグローバル企業では共通認識である。

また、宗教と宗教とのあいだの関係も、たとえば世界各国の学校で使われている宗教の教科書をみると、特定の宗教を敵視することは慎重に避けられ、「むしろ、『お互いに認め合おう』というメッセージがいたるところに見られ」(藤原 2011: 178) るのが標準的であり、多宗教共生がグローバルスタンダードとなっている。

残念ながら、「教会の壁の中」は、多様性の取り扱いという点では、決して「よいお手本」ではなかった歴史的過去がある (日本人の多くは、聖書を一度も手に取ったことはなくても、十字軍や宗教裁判のことは知っているものである)。また、現代でも、教理の違いや聖書理解の違いのように、多様性では済まされない違いが教会にはあるのも事実である。とはいえ、それは「教会の壁の中」の論理であり、「教会の壁の外」の人たちにしてみれば、キリスト教と他宗教とのあいだに、あるいはキリスト教の中に摩擦や衝突があれば、「ああ、やっぱりね」という冷ややかな目で見られてしまうのも、また事実である。ましてや、ホワイト化といわれる現代では、なおさらである (岡田 2022)。いまや、多文化共生——自分と異なる価値観や考え方の人たちと共に生きる——は、努力目標ではなく、グローバルな社会的現実となっているのである。

8-2-3 教会の本来的な多文化共生的性格

しかし、本来キリスト教や教会は多文化共生のよいお手本となる存在である。以前、筆者は、多文化共生・多宗教共生社会の現実の前提となる社会構造は、「信教の自由が法的に保障された社会」であり、そのために必要なのは「寛容 (tolerance)」であり、そしてそれらの歴史的源流はピューリタニズムで

あると論じた（相澤 2021）。最近の大学の講義では、これに加えて、「(たとえ自分には理解できなくても) 尊重する」という「礼節 (civility)」についても話をしているが、これもピューリタニズムの所産である（森本 2020: 242-245）。現代社会の多文化共生は、キリスト教に歴史的源流があり、また、多文化共生に必要な態度も、すでにキリスト教が明確化している。

さらにキリスト教は、多文化共生が目指す目標として、「多」の先にある「歴史の目標」としての終末論的な「一」を指し示すことができる。森有正はそれを「私ども自身まだ十分に発見していない、全人類を結びつけるなにかある偉大な紐帯」と呼び、「私どもは、今それが何であるか現実においては知りませんが、私どもはみなそれに向って憧れているということは出来ると思います。キリスト信者は終末の神の国の実現の中に……それを信じています」（森 1979: 444）と語っている。

「教会の壁の中」が、「教会の壁の外」にお手本を示す、という本来のあり方をするためには、教会は、まずもって「教会の壁の外」の多文化共生にキャッチアップする必要がある。そのうえで、EUの分断、アメリカの分断と、むしろ分断に向かっている（高城 2018）ようにも見える「教会の壁の外」に向かつて、何事かを語ることもできるようになるだろう。

伊藤師も語っていたように、シンガポールの教会では、現地の人たちが日本人とよい交わりを持ち、教会の大切な働きを担ってくれている。また、2つの日本人教会は、競合になってもおかしくないが、そうはならず、よい関係を持っている。こういうあり方は、日本国内の教会にとって、ひとつのモデルを示すことになるだろうし、現状においてすでに、少なくとも現地の日本人社会や日本人コミュニティに対する、よいお手本となるだろう。

8-3 新しい「日本の神学」の場所としての海外日本人教会 ——グローバルとローカルの「境界に立って」

以前の論文で、筆者は、「日本の神学」と海外日本人教会について論じたが（相澤 2018）、ここではそれを別の角度から論じてみよう。大木英夫によると、「日本の神学」とは、「日本で行われている神学」や「日本的な性質や性格を帯びた神学」のことでなく、日本をその対象とする神学である（古屋・大木 1989: 229）。そして大木は、1980年代に当時の首相の肝いりで始められた「国際日本文化研究センター」と「日本学」に言及し、いかにして日本学が日本を客観的に見る視点を持つことができるだろうか、と問う。そして、かつてルース・ベネディクトが外国人の目から日本文化を論じたように、「外国にその視点を設定することによって得られる」（古屋・大木 1989: 231）という可能性を指摘し、さらに、『『外国』人の目という『客観性』のシンボルは、超越的かつ絶対的な客観性としての『神』の視点を指し示していると見られるのではないだろうか。……これらはみな今日における『日本の神学』の可能性と必然性とを暗示しているように思われる」（古屋・大木 1989: 231-232）という。しかしそれは、日本人には日本の神学は不可能だ、ということではない。問題は、日本を神学的に対象化できる「神学的実存」である。「日本を『対象』とした場合、その神学的実存は日本の『外』に立つことになる。その『外』とは何処か。それは外国ということではない。日本の内から突破して『外』に立つ、一体そのような場所が何処にあるか、ということである。……それは、つまり、『日本の神学』

の神学的実存の成立の場所という問題である」(古屋・大木 1989: 255)。この神学的実存とは、日本の精神性から脱却し、神学的相対主義³をもって日本を見ることができるといえる実存である。そしてその確立のためには「回心」が必要であり、それゆえ、日本の神学の「場所」は教会である、とされる(古屋・大木 1989: 269-270)。

しかしこの場合、海外日本人教会は、日本の外に立っているのか、それとも中に立っていることになるのか。海外日本人教会は、日本の外にありつつ内にもあるというあり方をしているものであり、大木の言葉を借りれば、それこそ「超越的かつ絶対的な客観性としての『神』の視点を指し示している」、「今日における『日本の神学』の可能性と必然性とを暗示している」(古屋・大木 1989: 231-232) ような精神の場所ということになるのではないだろうか。パウル・ティリッヒは、「境界に立つ (auf der Grenze)」というあり方は、危機的でありつつ、最もクリエイティブなあり方であると言っているが(ティリッヒ 1978: 11)、その意味で、海外日本人教会は、立ち位置の不安定さがクリエイティブに転じる契機がある場所であると言えるだろう。

海外日本人教会が神学的な意味でクリエイティブな位置を持つなら、それは、伝統的な教会の二分法の「境界に立つ」教会、ということにある。神学は教会を、潜在的教会と顕在的教会、大文字Cの教会と小文字cの教会、普遍的 (universal) と個別的 (particular)、聖なる公同の・まことの一つなる教会と各個教会、といった図式で考えてきた。今風の言葉で言えば、(不正確ではあるが) グローバルとローカル、と言い換えることも、あるいはできるだろう。この図式の中で、たとえば「日本の教会」「日本のキリスト教」という場合、それは、個別性や具体性や特殊性のほうに寄せて考えることになる。「福音の土着化」やローカライズという議論も、同様であろう。しかし、たとえば海外の日本人教会は、「日本に限定されない」と同時に日本的でもあり、「〇〇国 (現地の国) に限定されない」と同時に〇〇国的でもある、ということと同時に成り立たせなければならない。これは危うい状況であると同時に、クリエイティブな状況でもある。

言うまでもなく各個教会は同時に聖なる公同の教会でもあるが、土着化やローカライズも重要である。しかし、ローカライズや土着化は、常に普遍性やグローバリティの「一」性の喪失、ローカライズされたグローバルでなく、ただのローカル、ガラパゴス的なローカルになってしまう危険と隣り合わせである。それは、グローバルな公同の教会の解体であろう。逆に、ティリッヒが、差異の中の同一性に宗教間対話の根拠を求め、具体的な多様性の根底にある究極の「一」の中に、宗教間対話を基礎づけたようなことは(ティリッヒ 1974: 100-101)、各個教会の具体的な現実を無化し、単なる抽象的な議論に陥るであろう。しかし、海外日本人教会の場合、教会の多様性との取り組みという現実が、特定のローカルに埋没することをゆるさず、抽象的な「一」に現実逃避することもゆるさない。「もはや、ユダヤ人もギリシャ人もなく……キリスト・イエスにおいて一つ」(ガラテヤ3: 28) という聖句を、キレイごとでなく現実化していかないと、教会が立ち行かないのである。

常に多様性を意識していなければならない海外日本人教会の状況は、教会を新約聖書に描かれている教会がそうであったようなグローバルなあり方へと再び解放する、いわば再グローバル化の方向で教会

3 神学的相対主義については、(大木 1994) を参照。

を考えるようにうながすのではない。それは、実質的な分断であるようなローカライズではなく、グローバルを前提としたローカル、いわばグローカルな、「Think globally, act locally」なあり方の教会版である。しかし、本来教会はそういうものであったはずであり、海外日本人教会はその先駆け、あるいは再生が始まる場所となりうるといえるかもしれない。

8-4 課題先進国としての海外日本人教会

最後に、これまで考察した、教会の不安定性、多様性といった、海外日本人教会の課題は、日本国内の教会には無関係の課題ではないということを強調したい。逆に、海外日本人教会は、国内の教会にとって、課題先進国のようなあり方をしていると言うことができる。

グローバル企業では、「日本はアジアの未来がわかるマーケット」（九門 2012: 59）、「日本の経済成長は止まりつつあるが、これまで日本が経験してきたことは、アジアでビジネスをする際の大きな強みとして活かせる。『課題先進国』の日本が世界に提供できる知恵はまだまだあるはずだ」（九門 2012: 60）と言われているようだが、日本が課題先進国といわれるのは、少子高齢化やエネルギー問題や自然災害などが理由である（総務省 2021）。しかし、既得権益や事なかれ主義や責任の所在の曖昧性、「家が火事の時に、合議制で誰が消すかをゆっくり決めるような仕組み……燃え盛る火を消さない人、問題を先送りにするような人が出世する……会議で決まる前に、率先して火を消そうとする人は叩かれるような、出る杭をお互いが監視し叩き合うような、問題あるシステム」（高城 2011）などのせいで、日本は課題対応後進国（あるいは失敗国）となりそうである。

日本国外に暮らす日本人が増え、日本国内に暮らす外国人が増えつつある今日、日本人の教会が、将来的には国内外とも現在の海外日本人教会に近づいていけよう。そうであるなら、日本人教会は、グローバル化・多文化共生化という課題にいち早く直面し、対応の努力をしている、課題直面先進国的なあり方として同時に、課題対応先進国的なあり方もしていると言える。グローバル化の中で日本国内の教会が将来直面しなければならない課題、あるいは、すでに直面しているが自覚できていない課題に、海外日本人教会はすでに直面し、自覚的に取り組んでいるのである。その取り組みを対岸の火事扱いして、「今までこれでやってきた」、すなわち「今までこれでやってこれた」ということに固執するなら、日本国内でなら、もうしばらくそれでやっていけるかもしれないが、将来的には、いわゆる「茹でガエル」状態になるのではないか。

もちろん、海外日本人教会が、「きずや汚れが何一つない」（2ペトロ 3. 14）教会だというわけではない。しかし、海外日本人教会は、たどたどしく日本の真似をしている教会でも、日本国内の教会の劣化版でもなく、グローバルな多文化共生との取り組みという点で、日本国内の教会よりも一歩先を進んでいる教会であると言える。その意味で、海外日本人教会が存在することは、日本国内の教会にとって恵みであるし、学ぶことがあるし、日本のキリスト教や日本の教会を、より豊かにしてくれると言えるであろう。

文献

- 相澤一、2018、「海外日本人教会：その歴史、現状、ビジョン：(1) ニューヨークの日本人教会（上）」『フェリス女学院大学キリスト教研究所紀要』3: 37-58. (2022年1月5日取得, https://ferris.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=2274&item_no=1&page_id=13&block_id=21).
- 、2020、「現代日本の多文化共生社会におけるキリスト教の存在意義：大木英夫の神学における『自由の伝統』からの考察」『フェリス女学院大学キリスト教研究所紀要』5: 17-37. (2022年1月5日取得, https://ferris.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=2475&item_no=1&page_id=13&block_id=21).
- 藤原聖子、2011、『世界の教科書で読む〈宗教〉』筑摩書房。
- 古屋安雄・大木英夫、1989、『日本の神学』ヨルダン社。
- 九門崇、2012、『アジアで働く——自分を活かす・キャリアが広がる』英治出版。
- 森有正、1979、『森有正全集第7巻 近代精神とキリスト教』筑摩書房。
- 森本あんり、2020、『不寛容論——アメリカが生んだ「共存の哲学」新潮選書。
- 岡田斗司夫、2022、「#425 コロナ戦争とホワイト革命+放課後」、岡田斗司夫ゼミ・プレミアム、(2022年1月11日取得, <https://ch.nicovideo.jp/okadatoshio-archive/video>)。
- 岡田平吾、2020、『武器になるグローバル力——外国人と働くときに知っておくべき51の指針』KADOKAWA。
- 大木英夫、1994、『新しい共同体の倫理学——基礎論（上）』教文館。
- 総務省、2021、「我が国が抱える課題と課題解決手段としてのICT」、(2022年1月5日取得, <https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r02/html/nd121110.html>)。
- 高城剛、2011、『時代を生きる力』マガジンハウス。
- 、2018、『分断した世界 逆転するグローバリズムの行方』集英社。
- Tillich, Paul, 1963, *Christianity and the Encounter of World Religions*, NY: Columbia University Press. (丁野政之助訳、1974、『キリスト教徒仏教徒対話』桜楓社。)
- 、1978、『ティリッヒ著作集 第10巻』白水社。

(あいざわ・はじめ)

フェリス女学院大学文学部准教授